

# 台湾の大学における日本語専攻の 「日本語文法」科目に関する一考察

關百華 / Chueh, Pai-Hua

淡江大學日本語文學系 副教授

Department of Japanese, Tamkang University

## 【摘要】

本論文分析台灣的大學日文系「日語語法」科目的教學計劃，考察中級日語語法教育的現狀與課題。文中指出：為培育高級日語人材，大學日語專攻的語法課程除了要採用重視溝通功能的「日本語文法」之外，在指導上，也應適度導入強調文法系統、語言構造的「國文法」。

## 【關鍵詞】

日語語法、日文專長、教學計劃、課本

## 【Abstract】

The article aims at analysis of the syllabus of the “Japanese grammar”, and to explore the current situation and topics of intermediate Japanese grammar education at university’s department of Japanese in Taiwan. To foster higher Japanese talents, the author believes that Japanese grammar education at universities, it is necessary to integrate the “Japanese Language” and “National Language” in university Japanese major.

## 【Keywords】

Japanese grammar, Japanese major, syllabus, textbook

## 1 はじめに

筆者は大学日本語専攻で教鞭を執って十数年も経っているが、一昨年より日本語専攻 2 年生を対象として、「中級日本語文法」(中国語原文:「中級日本語語法」)という科目を担当し始めた。まとまった日本語文法の指導経験が少ないので、ベテランの先生から経験に基づいた助言をもらい、知識と知恵を学びながら、より効果的な指導ができるように取り組んでいる。しかし、最小限の試行錯誤で、短時間で質の高い日本語文法の授業を実施できるようにするためには、プロの指導のほかに、的確な現状把握と軌道修正を行わなければならないと考える。

また、台湾では市販の日本語文法教科書・教材は多種多様なものがあるが、日本語専攻の学生のニーズに相応しいとは必ずしも言えない内容のものが多くある。特に台湾人教師が作った日本語専攻向けの文法教科書は数少ないのが現状である。

そこで本稿では、現在台湾の主な大学の日本語専攻で行われている「日本語文法」と題する科目の授業概要はどうなっているのか、どんな教科書・教材が採用されているのか、その現状を把握したい。さらに、筆者が勤めている淡江大学日本語学科における「中級日本語文法」科目の教育実態と比較分析し、日本語文法教育の課題と授業改善のための方策を考えていくことにしたい。

## 2 日本語専攻の「日本語文法」科目の現状

### 2. 1 主な大学の日本語専攻とは

戦後、台湾は中華民国政府に徹底的に反日教育を強要された。日本語の使用は「奴隸化の証」として看做されたので、禁止された。しかし、1963 年中国文化学院に台湾の大学として初めて日本語学科(「東方語文学系日文組」)が設立された。それから淡江文理学院(現淡江大学)が 1966 年に「東方語文学系」を、輔仁大学が 1969 年に「東方語文学系」を、東呉大学が 1972 年に「東方語文組」を設置した(蔡茂豊 2003: 17)。

1972 年、日中国交回復により台日間の国交が断たれると、しばらく日本語学科の設立は認可されなく、日本語教育は一時排斥されることになった。だが、日本の経済大国化とともに、日本語の必要性が高まり、新たに 1989 年には国立政治大学に「東方語文学系日文組」、1992 年には東海大学に「日本語文学系」が設立された。さらに、1994 年に最高学府である、旧帝国大学の国立台湾大学にも、「日本語文学系」が設置されたのである(岡本輝彦 2005: 112)。

日本統治時代には「国語としての日本語」が学校教育に組み込まれたが、現在では「外国語としての日本語」または「第二外国語としての日本語」が多くの大学に導入されている。

本稿では最も早く日本語学科を設置した文化、淡江、輔仁、東呉、東海の5つの私立大学、と政治、台湾大学の国立2校を取り上げ、これらの大学における日本語専攻の「日本語文法」科目の概要を考察することにする。

## 2. 2 「日本語文法」科目の開設について

台湾の大学における学科のカリキュラムは、「学科・学部・学校」という3段階の会議（中国語原文：「系・院・校3級会議」）で決定されたうえ、教育部（文部科学省に相当）への提出が義務付けられている。また、学科における教育内容をより理解してもらうための一環として、多くの大学でカリキュラム・マップや各教科のシラバスが学校のホームページ上に公開されることになっている。さらに、近年、国内外を問わず、大学の公式サイトによる情報発信、データ公開は大学の国際化の一つの外部評価指標として使われているので、台湾の大学でサイトのユーザビリティの向上にかなりの力を入れているところが多い。したがって、大学の公式Webサイトは各学科における個々の授業科目の内容の概要や計画を把握するための好材料と言えるだろう。

表1は、主な大学の日本語専攻の公式サイト上に掲載されているカリキュラムを調べた結果をまとめたものである。表1を見て分かるように、日本語文法に関する科目は、輔仁大学と東呉大学との「日語語法專題」（3年次開講）を除き、すべて必修科目として設けられている。文化大学では東呉大学と同じく、「日語語法（一）」（通年4単位）と「日語語法（二）」（通年4単位）が開設されているが、対象学年が1年違う。要するに、日本語学科では「日本語文法」を2年次に通年4単位の必修科目として開講しているのがほとんどである。

ちなみに、上記大学の「日本語文法」に関する科目の対象学年、必修・選択区分、単位数などの違いは、各大学の教育目標や教学の特色によるものだと考えられる。それに、各学科の卒業所定単位だけでなく、必修科目の総単位数も教育部の上限規定を守らなければならないので、諸般の事情により、文法に関する科目の単位数を削減しかねないという場合もある。

表1 「日本語文法」科目一覧表（2011 年度）

| 大学名  | 科目名称       | 必修<br>選択 | 開講<br>学年 | 単位数<br>学年ごと |
|------|------------|----------|----------|-------------|
| 文化大学 | 日語語法（一）    | 必修       | 2        | 4           |
|      | 日語語法（二）    | 必修       | 3        | 4           |
| 淡江大学 | 初級日語讀本與語法  | 必修       | 1        | 12          |
|      | 中級日語語法     | 必修       | 2        | 4           |
| 輔仁大学 | 日語語法專題     | 選択       | 3        | 4           |
| 東呉大学 | 日語語法（一）    | 必修       | 1        | 4           |
|      | 日語語法（二）    | 必修       | 2        | 4           |
|      | 日語語法專題     | 選択       | 3        | 4           |
| 政治大学 | 日語語法       | 必修       | 2        | 4           |
| 東海大学 | 日語語法（一）    | 必修       | 2        | 4           |
|      | 日語語法（二）（三） | *必修      | 3        | 4           |
| 台湾大学 | 日語語法       | 必修       | 2        | 6           |

\*説明：東海大学日本語学科3、4年次は「言語領域（言語・コミュニケーション）」、「文化領域（表象文化・社会文化）」の各領域の必修科目を設け、学生各自が興味に応じて選択履修する日語語法（二）（三）は「言語領域」の必修科目とされている。

（出所）上記大学の日本語学科のホームページより筆者整理

## 2. 3 「日本語文法」科目のガイドライン

文化大学、東呉大学、台湾大学の日本語学科の「日本語文法」に関する科目のシラバス（2011 学年度）が公式サイト上に掲載されているので、ここで、3校の共通点を探ってみよう。

まず、文化大学のシラバスによると、「日語語法（一）」（二次開講）の講義目的は、『初級日本語』で学んだ文法知識を復習し、日本語能力試験3級～2級レベルの日本語力を身につけることを目指す」とされている。また、講義内容については「述語の語尾変化少々勉強しにくい。中でも特に動詞の変化が重要だ。本課程では動詞、助動詞がもつ語形変化を体系的に解説する。また、動詞のカテゴリーについて、例えば時制（tense）、アスペクト（aspect）、モダリティ（modality）、様態（voice）なども簡単に説明する」と明記されている（中国文化大学日本語文学系 2012）。

文化大学の「日語語法（二）」（３年次開講）の目的・講義内容については、「日本語文法の基礎を深め、運用の能力向上を図る。文法知識を補完しながら、日本語の特徴と文の構造を理解させ、正確な構文解析ができるようにする。」「助詞の学習を中心として、格助詞、接続助詞、副助詞、終助詞などの特徴の理解と運用能力の養成に重点を置く。」とある（中国文化大学日本語文学系 2012）。

それから、東呉大学のシラバスによると、「日語語法（一）」（１年次開講）では「日本語の４種類の述語（動詞、形容詞、形容動詞、名詞）の語尾変化の形とその使い方を学ぶ。よって、述語のさまざまな形態を理解させ、日本語文法の基礎力を固める。」と記載されている。また、「日語語法（二）」（２年次開講）は『日語語法（一）』に引き続き、より高度な文法能力の養成を目標とする。助詞、助動詞、その他の品詞を授業内容とする。10 品詞全般を理解するとともに、日本語文法の全体像を把握できるようになる」ことが狙いである。また、「日語語法專題」（３年次の選択）はさまざまな文法トピックを系統的に紹介し、より深く、日本語文法を体系的な理解することを狙いとする（東呉大学日文系 2012）。

台湾大学の「日語語法」（２年次通年６単位）は用言の活用と助詞の使い方を授業内容とし、①日本語文法の文法体系のアウトラインを把握すること、②動詞、形容詞、形容動詞などの用言の活用形、及びそれらにつく助動詞、助詞の用法、意味を理解すること、③作品の講読を通じて助動詞と助詞の用法、意味を解説していくこと、④助詞・助動詞の類語の用法、意味、使い分けを解説すること、などによって、読解力と表現力をさらに深めることを目標としている（台湾大学日文系 2012）。また、同シラバスの中で、特に注目してもらいたいのは教科書を使わないことである。それは次のような理由がある。

「日本語の助詞・助動詞は抽象的な概念を表すという特質を持っているので、助詞・助動詞を理解するには単に文字の説明だけでなく、シュチュエーションの体得（中国語原文：情境体会）も大事である。（中略）文法トピックに応じて柔軟に現代文学作品から用法例を取り上げ、前後の文脈やシュチュエーションを解説することによって意味や語感を的確にとらえることのできる力を養う。」

つまり、シラバスの調査によると、台湾大学の「日語語法」は、文化大学や東呉大学とは①品詞の分類・用法を習得させること、②動詞、助動詞、助詞な

どを中心とした伝統的な「構造シラバス」<sup>1</sup>が採用されていること、③日本語の基礎固めをして、運用能力のための文法を確実に習得することを目的とすること、などの共通点がある。

しかし、台湾大学では日本語感覚を体感・理解させるために、教科書を使用しない代わりに、文法項目に応じて文学作品の講読を行う。こうして、教材、教授法の面で学生の理解を促進する工夫が凝らされているのは、「場面に適した表現が足りないので、生きた日本語の学習にならない」という「構造シラバス」の短所からの脱却を図ったものと見てよい。

### 3 淡江大学日本語専攻の「日本語文法」の現状

#### 3. 1 2010年度からの新しい文法授業

本学日本語学科（淡水キャンパス）では、1年次に「初級日語読本与語法」（通年 12 単位）という科目が設けられているが、大人数の授業の中で共同教科書の『新文化日本語 初級』（文化外国語専門学校・大新書局）を使用して、総合日本語の形で精読・文型の授業が進められている。

2年次になると、1年次で学んだ基本を踏まえて、「中級日語読本」（通年 8 単位）と「中級日語文法」（通年 4 単位）がそれぞれ独立した科目として設置されている。

また、2010 年度から、専門科目の基礎・基本の定着を図るために、「中級日語読本」と「中級日語文法」の 2 科目では、通常の 70 人クラスを 35 人の 2 クラスに分けて授業を展開することになった。さらに、同じ教員が同一のクラスの「中級日語読本」（週 2 回、2 コマずつ）と「中級日語文法」（週 1 回 2 コマ）を担当することにより、週に 3 回同一の教員、学生と顔を合わせることで、教員と学生との交流が密になり、教員を中心にクラスの一体感が生まれてくる。何よりも同一教員による「中級日語読本」と「中級日語文法」の実施は学生の理解度に合わせて、臨機応変に授業内容を連携・調整することも可能であるので、学習効果を高めることが期待される。

なお、本学日本語専攻の「中級日語文法」クラスは、「日間部」（昼間部）の

---

<sup>1</sup> 「構造シラバス」（「文法シラバス」とも言う）は、文法構造を配列したリストである。日本語を体系的に教えられること、文法的分析能力を養うのに有利であること、などのメリットがあげられる。（市川保子（1995）「技能別クラスにおける文法シラバス・リスト作成の一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10号、p 6）

6 クラスと「進学班」(夜間部)の4 クラスがあり、計 10 名の教員が担当している。担任教員は全員台湾人教員で、2 年生のクラス担任をしているのがほとんどである。

台湾では日本語専攻の文法は、主に台湾人教員が中国語を交えて教える。台湾人教員の利点は①日本語と中国語の言語差異が明瞭で、助詞や微妙なニュアンスを説明できる。②「直接法」<sup>2</sup>と比べて複雑な説明の時間が短縮でき、たくさん学べる。③学習者が学習項目をどれだけ理解できているか把握しやすい。④母語で学習者が安心できる、などがよく挙げられる。しかしその一方で、学習者の母語を使用する教授法(いわゆる「間接法」)は次のような短所も指摘されている(河野俊之 2011)。①学習者・教師ともに、媒介語に安易に頼ってしまいがちである。②目標言語(日本語)に接する時間が短くなる。③日本語で理解するという思考回路が作られるのが遅くなる。とは言え、「直接法」には教員の素養、経験、能力や学習者のレベルの違いによって向き不向きがある。

上記の長所と短所を踏まえて、本学では効率的に授業を進められるように、「間接法における直接法の部分的応用」という手法が多く採用されているのである。

### 3. 2 中級日本語文法のシラバス

先に述べたように、本学では「中級日語読本」と「中級日語語法」を同一の教員が担当する、いわゆる「ひとりペア授業」が実施されている。

「中級日語読本」における全体的なコース・デザインは教師間で統一されている。また、教科書の使用については、全てのクラスで「初級日語読本」の次に続く『新文化日本語 中級』(文化外語専門学校・大新書局)が採用されているので、授業進度も中間・期末テストの試験範囲もほぼ同じである。

これに対して、「中級日語語法」の実施については、学年共通の授業目標が定められているが、授業の内容、教科書の使用、進め方などは全て各自に任されている。

共通の授業目標とは「日本語の解説と討議を共に重視し、文の構造や文法の理解を深めさせ、言葉の力を高める」(淡江大学 2012) ことである。つまり、

---

<sup>2</sup> 直接法とは、媒介語を使用せず、聞いて話せるようになることを目的に、目標言語を使用した教授法である。



細かく具体的に規定されておらず、教員の自由裁量や授業における創意工夫がかなり幅広くできる。それゆえ、教科書・教材が異なるのはもちろん、教員によって強調するところも違うし、切り口も多少違ってくると思う。

それぞれの教員のシラバスを見てみると、「中級日語語法」の年間授業内容を大まかに分けると、三つのタイプがある。まず一つ目のタイプは、品詞の種類（品詞の働き）、文構造、文の組み立て、敬語などを教える、典型的な文法授業である。各品詞の意味・用法の解説、いわば国文法式の文法・文型の積み上げ学習を通して文法力の定着を図るのは、従来から比較的多く見られた日本語の文法の教え方である（谷口龍子 2000）。これは特にベテラン教員に多く採用されている。

しかしながら、典型的な文法授業は、コミュニケーションの視座が欠落していたとよく指摘されているように、最近に至って、コミュニケーション重視の文法に教育の焦点があてられている<sup>3</sup>。こうした中で、近年日本語教育では「文構造重視の文法からコミュニケーション重視の文法へ」の授業のやり方の転換が図られ、機能・場面重視の文法教科書も普及してきた。そのため、二つ目のタイプは、こういう新しい教科書を用いて、基礎的な文型事項、文型の使い分けの解説、練習を行う。基本的に週一回の授業で一課ずつ学ぶ。

そして最後の三つ目のタイプは前述の二者を統合する形で、品詞の分類（特に動詞、助詞、敬語）、文型事項、文型の使い分けなどの内容について学ぶ。つまり、文法の体系的な知識習得とコミュニケーション力の養成を目指そうとするものである。

なお、各教員のシラバスによれば、授業の進め方は、「説明・解釈」、「練習（ドリル）」、「小テスト」が最も多く利用されている。そのためか、「文法授業が退屈で単調になりがち」というイメージも確かにあると思われる。

### 3. 3 日本語文法の教科書・教材

教科書・教材の使用については、「どんな教科書を使っているかを聞いただけで、どんな教育がなされているか想像することができる」（国際交流基金

---

<sup>3</sup> 例えば、野田尚史は「これまでの日本語教育文法は、文の構造だけが重視され、実際のコミュニケーションはあまり重視されなかった時代に考えられたもの」と指摘しており、コミュニケーションのための日本語教育文法の必要性を強調している。（野田尚史「コミュニケーションのための日本語教育文法」『日本語・日本語教育を研究する』第28回、pp. 14-15）



1983)と言われるように、授業内容の構成、教授法、学習評価などにおいて非常に大切な位置を占めているのは言うまでもない。

王敏東氏は2008年末までの台湾で見られた日本語文法の教材を次のように論じた(王敏東 2012)。

1. 学校文法<sup>4</sup>の品詞から導入する教材が最初に(戦前から)見られた編纂方式である。学校文法の品詞から導入する教材(日本語文法に対する総論や、各品詞についての説明のような教材)は中国人独自で完成されたものが多い。
2. 文型から文法を導入した教材は1970年代より見られるようになってきている。このような文型文法は外国人を対象とする日本語教育が強く意識された産物である。
3. 日本語能力試験の資格取得を目標とした教材は該当試験の出題基準が公布された後、1990年代初期以降のことである。日本語能力試験に関する文法の教材の作成には日本人が大きな役割を果たしている。

要するに、台湾における日本語文法教科書の作成は時代と共に発展してきた。その内容は学校文法、文型文法、日本語能力試験に関する文法などがあるように、多種多様な教科書類が編纂・発行、加工されてきた。

しかし、日本語専攻2年にとって、日本語文法は全く新しい教育内容ではないので、教科書の編集をより工夫しなければ学習効果が十分に現れないと考えられる。

ところで、2011年度、本学日本語専攻の「中級日語語法」授業で使用する教科書・参考書を表2にまとめる。

表2に示すとおり、本学で使われている教科書・参考書は大きく三つの種類に分けられる。一つは日本で編纂され、台湾の出版社に発行依頼権を授けて出版したものである。二つは台湾人の学者が作成したものである。もう一つは、日本で市販されている日本の中学で学習する国文法の参考書兼問題集である。

10クラスにおいて、最もよく使われているのは『短期集中初級日本語文法総まとめ ポイント 20』(スリーエーネットワーク 2004)とその姉妹篇の『中

---

<sup>4</sup> 日本の中学や高校で行われている国語科の学校文法は教科文法とも言う。学校文法は橋本文法をもとにしていると言われている。

級日本語文法要点整理ポイント20』(スリーエーネットワーク 2007)である。  
このシリーズは、いわゆる台湾の出版社が版權を獲得し、日本人の学者が編纂したものである。この二冊は、意味の似ている文型が集められ、要点を簡潔にまとめてあって、しかも練習つきである。

表2 「中級日語語法」教科書・参考書一覧 (2011年度)

| 書名   | 著者名                            | 出版社                              | 利用した教員数 |
|--|--------------------------------|----------------------------------|---------|
| 短期集中初級日本語文法<br>総まとめ ポイント 20<br>(台湾版:『短期集中初級<br>日本語文法總整理』)<br>-----<br>中級日本語文法要点整理<br>ポイント20 (台湾版:『重<br>點集中中級日本語文法總<br>整理』) | 友松悦子<br>和栗雅子                   | スリーエー<br>ネットワー<br>ク (大新書局<br>印刷) | 6 名     |
| 現代日語文的口語文法<br>(台湾出版)   | 蔡茂豐                            | 大新書局                             | 5 名     |
| くわしい国文法 中学1～<br>3年   | 田近洵一                           | 文英堂                              | 2 名     |
| 初級から中級への日本語<br>ドリル 文法 (台湾版:<br>『日本語練習帳 〈文<br>法〉』)  | 松本節子<br>佐久間良子                  | ジャパント<br>イムズ (大新<br>書局印刷)        | 2 名     |
| 日華辞典 (台湾版の中日<br>辞典)  | 不定                             | 不定                               | 1 名     |
| 実用日語語法 (台湾出版)  | 鄭婷婷                            | 致良出版社                            | 1 名     |
| ふしぎ発見! 日本語文法<br>(台湾版:『日本語運用力<br>専門塾』)  | 名古屋大学日本語<br>研究会 (蔡佩青<br>編集・翻訳) | 三弥井書店<br>(衆文図書<br>印刷)            | 1 名     |

\*説明:

1. この一覧表は、2011年度「中級日語語法」担当教員10名のシラバスをもとに、筆者が作成したものである。
2. 『短期集中初級日本語文法総まとめポイント20』は第一学期、『中級日本語文法要点整理ポイント20』は第二学期に使われている。

3. 複数の教科書・参考書を採用した教員が多くいる。

商品の説明によると、前者は『スタートテスト』で腕だめし。『ポイント』で文法知識の総整理。『練習問題』で実力養成。初級全体の総整理に、中級へ進むための橋渡しに最適。」である（スリーエーネットワーク 2012）。後者は「はじめに助詞など構造の面からの学習、そして、中級の大きな柱となっている複文の学習、わたし（話者）の気持ちを伝えるいろいろな言い方の学習、社会生活に溶け込むための運用面での学習」へと進んでいく（友松悦子・和栗雅子 2007: iii）。また、インターネット上のカスタマーレビューによると、前者は「『みんなの日本語』を終え、一通り初級文法が終わったら、その確認整理に最適」、後者は「日本語検定の二級対策の本」と評価されている。

実は『みんなの日本語』は本学日本語専攻において1年次の会話教科書として使用されている。また、日本語能力試験N1取得が本学日本語専攻の卒業要件になっている。したがって『短期集中初級日本語文法総まとめ ポイント20』と『中級日本語文法要点整理ポイント20』の二冊は2年生にとって相応しい文法教科書かもしれない。

しかし、この二冊を教科書として採用した教員たちの話を聞くと、「練習問題が付いているので、知識を定着させるのに役立つ」、「実際に出会いそうな自然な場面・状況を通じて練習することで、コミュニケーション能力を向上させることができる」と言ったメリットがある一方、「全文法項目をカバーしているわけではないし、体系的な文法学習に物足りない点がある」、「中国語訳に時間がかかりすぎて、効率的ではない」などのデメリットもあるようである。そのため、「次の学期にこの教科書の使用をやめようかと考えている」という声も聞く。

さて、少人数クラスが導入される前に、東呉大学の蔡茂豊氏の『現代日語文の口語文法』（大新書局）が最もよく使われていた。この文法教科書は台湾人を対象とした現代日本語文法の入門として編集された教材である。1987に初版が出版されたロング・ベストセラーなので、その影響は広範囲かつ長期間に及ぶ<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 蔡氏は『現代日語文の口語文法』を「為國人學習日語文法指出迷津。全國日文系所採用。」と評価している。（蔡茂豊（2006）「蔡茂豊教授簡介」『全国応用日語教学研討会 会議手冊』国立高雄餐旅学院、p5）

蔡氏の『現代日語文的口語文法』は、学校文法の品詞論により構成されたもので、いわゆる従来の文法教科書である。この種の教科書は、主に文の「形」と「意味」の記述に重点を置き、その文型が、「どのような文脈」で「どのような機能」を担って使用されるのか、といった運用面からの記述に欠けていたことがよく挙げられる（太田陽子 2008 : 2）。しかし、その反面で学校文法の構造シラバスは、体系的に教えやすく、学びやすいので、「実生活の結びつきが薄い」と批判されつつも、文法知識の定着という立場から、あえて学校文法の教科書・教材を採用する教員が少なくない。ところが、素材内容の時代遅れなどの理由で、近年、蔡氏の著作ではなく、田近洵一の『くわしい国文法 中学 1～3 年』（文英堂）や鄭婷婷の『実用日語語法』（致良出版社）を利用する教員もいる。

こうして、どういう教科書を使っても、各教員によって評価は違ってくるし、帯に短し襷に長しということは避けられない。さらに、市販の文法教科書・教材の中で適当なものがないという理由で、2011年度に、教科書を利用せずに、手作り教材や適宜プリント教材で授業を行うクラスが2つもあった。

#### 4 国文法と日本語教育文法の問題

本学の「中級日語語法」科目のシラバスから分かるように、同じく中級日本語文法と言っても、担当教員によって、授業内容には若干の違いがある。これは単なる従来のタイプと新しいタイプの教科書・教材の使用問題だけではなく、文法体系などの問題でもある。

一言で言うと、これは知識として国文法の体系を教えることに重点を置くか、それとも自然な表現を重視し、コミュニケーションのための日本語文法を教えるか、という教育理念の違いから生じた問題である。

ちなみに、本学における「中級日語語法」科目では授業経験の長い教師であればあるほど、国文法の品詞論、文節の関係や文の構造の授業を行っているという調査結果が現れた。しかし、その中で、コミュニケーション重視の日本語教育の文法教科書を採用しつつ、国文法の副教材や自作プリントを使っているというベテラン教員がいる。一方、国文法の教科書を利用しつつ、Web教材で日本語教育文法を補充している教員もいる。しかも、ほとんどの教員は「中級日語読本」（共通教科書は日本語教育文法による編成）の授業と連動して、文型指導のとき、日本語教育文法と国文法の両方の文法用語を同時に提示する。そのため、簡単に「国文法派」と「日本語教育文法派」のどちらとも言い切れ

ないだろう。

ところで、日本の義務教育で行なわれる国語の時間の国文法は母語話者のための文法教育であり、外国人に日本語を教える日本語教育のための日本語文法とでは教育目標はもちろん、内容にも、教授法にも違いがある（陳麗華 2006 : 33）。にもかかわらず、本学を含めて台湾の主な大学の日本語専攻は国文法教育から脱却しない、又はできないのはなぜであろう。ということは、同じ中国語圏の中国の例が参考になると思う。

鮑頭陽は2011年に中国における主要大学の日本語学科専用教科書の使用状況を調べた。調査対象となった7つの大学のうち、5つの大学は北京大学外国語学院日本語学部編・北京大学出版社が2004年に出版した『総合日本語』という教科書を使っている。残りの2つの大学は北京第二外国語学院編の『基礎日本語』と上海外国語大学編の『新編日本語』という教科書を使用している。ちなみに北京第二外国語学院編の『基礎日本語』は、日本語教育の文法体系を採用しており、北京第二外国語学院編の『基礎日本語』と上海外国語大学編の『新編日本語』は学校文法の文法体系を使用している（鮑頭陽 2011 : 63-64）。鮑氏の調査で中国の大学専攻日本語の初級段階では、日本語教育の文法体系の採用が圧倒的に多いことが分かった。

また、田中祐輔は、中国全国の日本語専攻学科の主幹科目とされ、設置時間数が最も多い「精読」の高年級段階用教科書と日本の高等学校国語教科書を比較してみた結果、次の二点が明らかとなった（田中祐輔 2012 : 21）。

1. 現行日本語教科書の掲載作品・作家は、国語教科書と重複することが多く、80年代当時指摘された「国語教育を巡る課題」<sup>6</sup>が実質的に引き継がれている。
2. その要因は「正しい日本語・日本文化・日本人の心」の習得と理解という目標が、教学大綱・教師・学習者・教科書作成者・研究者間に広く共有され、教科書制作では、国語教科書を参照するのが適切

---

<sup>6</sup> 日中国交正常化になると、日本語教育を推進するために、中国の高等教育機関における日本語教育現場では、日本の高等学校の国語科教諭が数十名という単位で招聘された。しかし、このような動きの中、「第二言語としての日本語の教育は国語教育とは異なるため、高等学校国語科教諭等が国語教育の内容・手法で教えることは問題である」という「国語教育を巡る課題」が1970年代末から80年代にかけて活発に議論された。（田中祐輔 2012 : 21）

かつ効率的だと考えられているからである。

上記の研究調査に見られるように、現在の中国の大学専攻日本語教育では、日本の国語教育からの影響が引き続き存在し、「国文法」と「日本語文法」の立場が混在しているのは確かである。

中国の例を踏まえて、台湾の大学専攻日本語教育の文法教育は日本の国文法の体系から脱却しない、又はできない理由・必要性について次のようにまとめてみたい。

1. 日本の植民地とされた時代には、「国語としての日本語教育」が行われていた。当時の日本語教育は「国民性の涵養、国語及び実用的な知識技能の習得」を方針としていたものであった(王筱琪 2009 : 23)。戦後初期の台湾人日本語教師は日本統治時代を経験した人ばかりなので、日本語を国語として勉強させられたことがある。
2. 蔡茂豊氏は戦後の「台湾の日本語教育と教育史の第一人者で、文法解説書など多数の著作は教科書的な存在となっており、教え子は台湾全土の大学など日本語教育の第一線に立っている」(読売新聞 2005 年 5 月 25 日)。しかも蔡氏の『現代日語文的口語文法』(1987 年初版)は台湾の多くの大学専攻日本語教育で文法教科書として採用されていた。その影響を受け、国文法の体系が継承されてきた。
3. 普通は、台湾人ベテラン教師(殊に 50 代以上)が大学日本語専攻の主幹科目の日本語文法を担当することが多い。また多くのベテラン教師は日本の大学院での専攻は国語・国文学であって、日本語教育学ではない。
4. 2009 年度「台湾日本語教育現状調査」(交流協会台湾事務局 2010)によれば、台湾全国の日本語学習者は 247,641 人であり、そのうち、わずか 18,505 名の学習者が高等教育機関で日本語を主専攻として学んでいることが分かる。単純に割ってみると、92%強の学習者が大学日本語専攻に入らずに、日本語を勉強していることになる。大学日本語専攻の存在価値をより確立するために、コミュニケーション重視の日本語文法教育だけでなく、国文法の基礎・基本の定着にも取り組むべきだと思う。
5. 中国の大学と同じく、台湾における専攻日本語教育は高度日本語人



材の育成をねらいとしているので、コミュニケーションに対応するための日本語運用能力はもちろん、日本語についての感覚養成、日本語学研究のための基礎知識や古典文法の学習との関連、などの点から見ても、ある程度の国語・国文学の教養が必要不可欠である。

6. 市販の国語辞典は、日本語学からの影響で一部新しい文法用語が使われ始めているとは言え、基本的に国文法に従っている。また、近年、日本語の文法に関する教科書・教材が多く出版されているが、国文法の立場に立つものと、日本語教育文法の立場に立つものが混在している。それゆえ、日本語文法の授業や自学自習の効果を高めるために、国文法の知識を教える必要がある。

## 5 おわりに

以上、台湾の大学における日本語専攻の中級日本語文法の実施状況と特徴について述べてきた。主な大学の日本語文法に関する科目のシラバスの考察から分かるように、中級から日本の国語学の文法体系を採用するのが圧倒的に多い。

また、本学の例を見ても明らかなように、多種多様な日本語文法の教科書・教材が採用されているが、ほとんどの教員は教科書とは別にプリント教材やWeb教材を補助教材として用いている。さらに、市販の教科書を使わず、自作プリントで授業を進めるという教員もいる。これは日本語専攻向けの最適な文法教科書がまだ現れていないということを如実に表していると言えよう。

教科書の使用については、「教科書で教える」のではなく、「教科書を教える」のだとよく言われている。つまり、教科書の内容を学習者に詰め込むに汲々とするのではなく、教科書を材料として使い、より有意義な力を身につけさせなければならないのである。

ところが、「教科書で教える」にしても、教える内容と到達目標がマッチしていないと、学習効果が上がらないだけでなく、異なるクラス間の学力格差が生じる可能性も高い。そこで、「教科書で『何を』基礎・基本として教えるか」、その「何を」の内容が問題になってくるわけである。また、その「何を」を策定する前に、学力の到達状況を把握するための到達目標を具体化する必要があると考える。

ここで言う到達目標とは単なる日本語能力試験N1やN2レベルの日本語力を身につけることを指すのではない。ここ数年、日本語能力試験合格が多く



の大学日本語専攻で一つの卒業要件となっている。また、日本語能力試験合格は日本姉妹校への交換留学や進学・就職にも有利なので、試験合格を目指して過去問と問題集を使い、自学自習に励む学生が増えてきた。そのために、本学では大学 2 年の時、すでに N 2 に合格した学生が多く、N 1 合格の学生も少なくない。

そこで、中級日本語文法授業の到達目標の策定に当たっては、日本語能力試験 N 2 ～ N 3 レベルの文法力を意識するとともに、台湾の大学での日本語文法教育の現状を踏まえて、「日本語教育文法と国文法の両立の必要性」という課題に応えることもよく考えなければならない。

すなわち、大学の日本語教育現場の方と日本語教育・国語教育の研究者の知見を合わせて、「実用に即したコミュニケーション」に焦点を当てる一方で、「文法の系統性」、「言葉の仕組み」にも十分配慮し、高度日本語人材の育成に必要な基礎・基本的な文法力とは何かを改めて議論したほうがよいであろう。このことによって、台湾の大学専攻日本語教育の授業内容の更なる充実に役立ち、理論と実践を統合できる、より優れた日本語人材が養成されることを大いに期待している。

## 引用文献

1. 市川保子（1995）「技能別クラスにおける文法シラバス・リスト作成の一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10号、pp. 1-18
2. 王敏東（2012）「台湾における日本語文法の教材について」『日本学刊』第15号、pp. 106-122
3. 王筱琪（2009）『台湾における日本語教育の現状調査—実態分析と問題点』淡江大学日本語学科修士論文
4. 太田陽子（2008）『運用力につながる文法記述』試論—モダリティ表現「ハズダ」の分析を通して—』早稲田大学日本語教育研究科博士論文
5. 岡本輝彦（2005）「戦後の台湾社会における日本語・日本語教育」『東京経営短期大学紀要』第13巻、pp. 107-114
6. 黄鈺涵（2003）「日本語初級・中級教材における推量表現『ようだ・らしい・みたいだ』について—台湾人日本語学習者のための提言—」『早稲田大学日本語教育研究』2号、pp. 95-119
7. 国際交流基金（1983）『日本語教科書ガイド』北星堂書店
8. 蔡茂豊（2003）『台湾日本語教育の史的研究（下）1945年～2002年』大新書局
9. 蔡茂豊（2006）「蔡茂豊教授簡介」『全国応用日語教育学研討会 會議手冊』国立高雄餐旅学院、pp. 2-7
10. 田中祐輔（2012）「中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題」『リテラシーズ』10、くろしお出版、pp. 21-30
11. 陳麗華（2006）「台湾の大学における日本語教育の沿革に関する一考察—特に第二次大戦後に焦点を当てて—」『大阪産業大学論集. 人文科学編』120、大阪産業大学教養部、pp. 31-41
12. 友松悦子・和栗雅子（2007）『中級日本語文法 要点整理 ポイント20』スリーエーネットワーク
13. 野田尚（2006）「コミュニケーションのための日本語教育文法」『日本語・日本語教育を研究する』第28回、pp. 14-15
14. 鮑頤陽（2011）「中国の主要大学日本語学部における日本語教科書の使用状況」『朝日大学一般教育紀要』37号、pp. 55-65

## Web サイト

1. 河野俊之 (2011 年 9 月 15 日) 「文法の導入について考えよう」  
<http://www.bonjinsha.com/kawano-toshiyuki/18/body.php> (2012/6/24 アクセス)
2. 交流協会台湾事務局 (2010) 「2009 年度台湾における日本語教育事情調査 台湾日本語教育現状調査 報告書」  
[http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/15/F7D6421DC15860F2492579FA0021A758?OpenDocument](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/15/F7D6421DC15860F2492579FA0021A758?OpenDocument) (2012/07/18 アクセス)
3. 国立政治大学日本語文学系「課程資訊」  
<http://japanese.nccu.edu.tw/course/pages.php?ID=course1> (2012/6/18 アクセス)
4. スリーエーネットワーク「短期集中初級日本語文法総まとめ ポイン 20」  
<http://www.3anet.co.jp/ja/1277/> (2012/6/27 アクセス)
5. 台湾大学日文系「本系課程列表」  
[http://coursemap.aca.ntu.edu.tw/course\\_map\\_all/class.php?code=1070](http://coursemap.aca.ntu.edu.tw/course_map_all/class.php?code=1070) (2012/6/18 アクセス)
6. 谷口龍子 (2000) 「平成 11 年度『台湾における日本語教育事情調査』報告書」  
[http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3\\_contents.nsf/06/ED97926AA7BC824649256F430025B77D?OpenDocument](http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/06/ED97926AA7BC824649256F430025B77D?OpenDocument) (2012/07/18 アクセス)
7. 淡江大学「淡江大学課程查詢系統」<http://esquery.tku.edu.tw/acad/>  
(2012/6/18 アクセス)
8. 中国文化大学日本語文学系「課程介紹」  
[http://www.pccu.edu.tw/unit/unit.asp?unit\\_type=2&col=CRG](http://www.pccu.edu.tw/unit/unit.asp?unit_type=2&col=CRG) (2012/6/18 アクセス)
9. 東海大学「東海大学課程地図」<http://coursemap.thu.edu.tw/> (2012/6/18 アクセス)
10. 東呉大学日文系「学士班課程綱要」<http://www.scu.edu.tw/japanese>  
(2012/6/18 アクセス)
11. 輔仁大学「輔仁大学日文系課程學習地図」<http://www.jp.fju.edu.tw>  
(2012/6/18 アクセス)
12. 読売新聞 (2005 年 5 月 25 日) 「断交後初、台湾人に叙勲『日本語教育に尽力してきた台湾人全体の受章だ』」  
<http://mimizun.com/log/2ch/news4plus/1116950765/> (2012/7/17 アクセス)